

クレジット:

UTokyo Online Education 東京大学朝日講座 2018 西村 明

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限って、特に記載のない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下で利用することができます。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

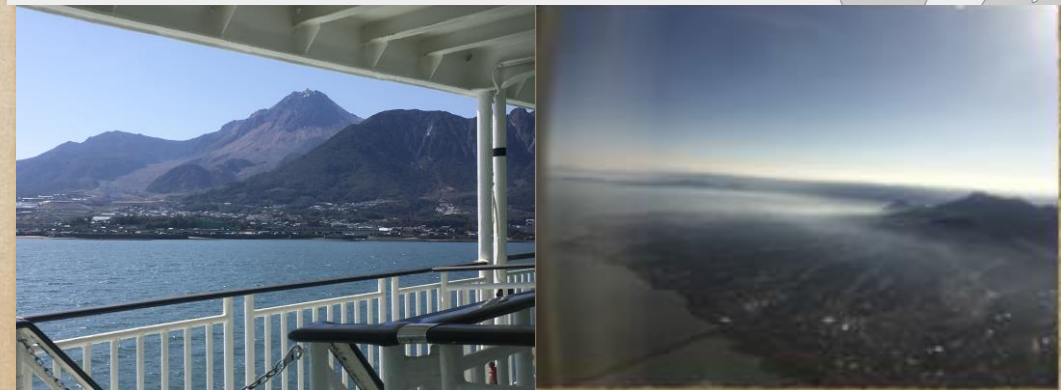
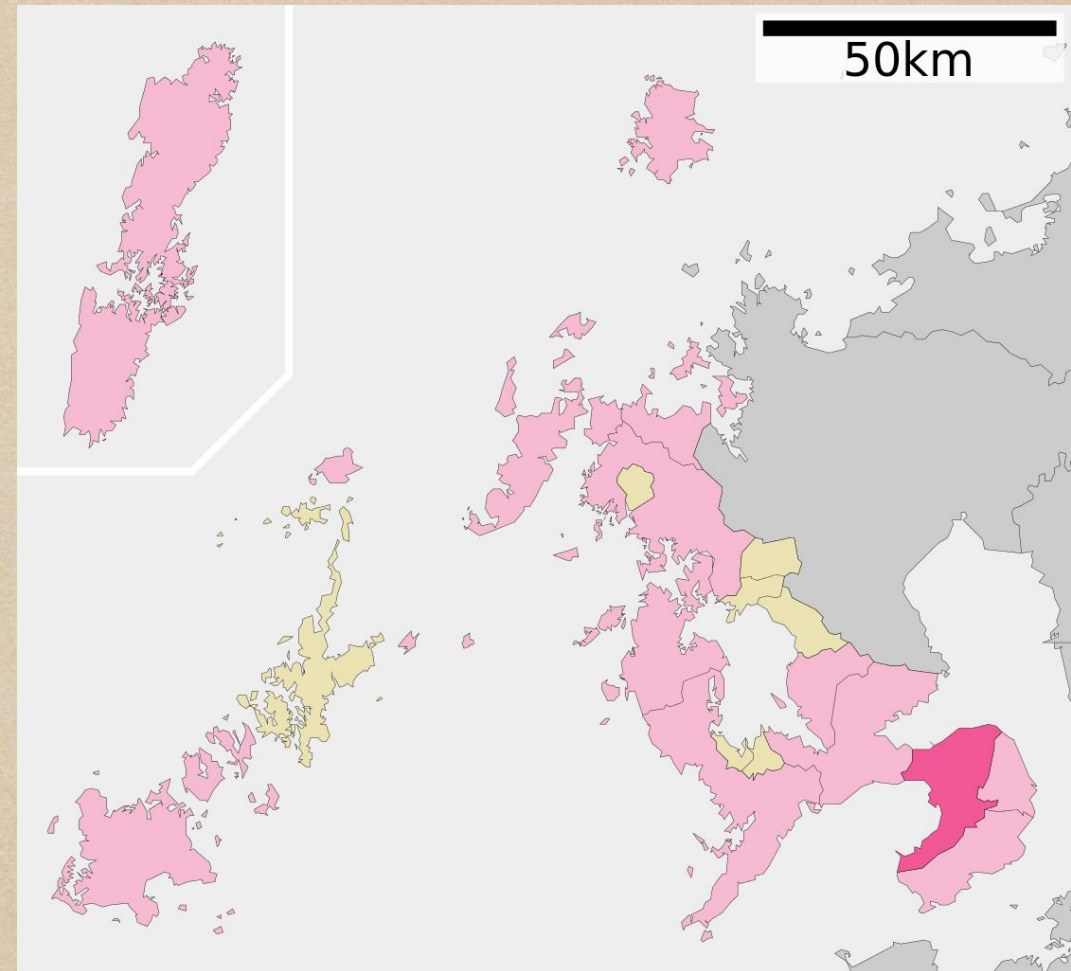
本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

余は如何にして Oターン大学教員となりし乎

東京大学朝日講座
2018年度講義「居場所」の未来
2018年10月24日
西村明(宗教学)

Oターンとは？

- ・ Uターン／Iターン／Oターン
- ・ 長崎県雲仙市＝本拠
東京＝単身赴任
の2拠点居住



Picture from
Wikipedia
[https://ja.wikipedia.o
rg/wiki/%E3%83%95%
E3%82%A1%E3%82%A
4%E3%83%AB:%E5%9F
%BA%E7%A4%8E%E8%
87%AA%E6%B2%BB%
E4%BD%93%E4%BD%8
D%E7%BD%AE%E5%9
B%B3_42213.svg](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:%E5%9F%BA%E7%A4%8E%E8%87%AA%E6%B2%BB%E4%BD%93%E4%BD%8D%E7%BD%AE%E5%9B%B3_42213.svg)
CC-BY-SA3.0

東奔西想〈1〉キーワードは「職と住」

地域に軸足、往来の日々

共同通信配信(デリーー東北2014年1月24日)

長崎に帰省しなかった今年の初詣は、鹿児島県の自宅近くの神社だった、家内安全と世の平安を祈り、仕事への尽力を誓う。願文は毎年ほぼ同じだが、かける思いは年々変わる。

2013年度の初め、9年間勤めた鹿児島大から東大に職場を移った。母校に戻ったはずなのだが、よそへ離れてしまったというのが実感だ。大学院の拠点づくりで滞在した奄美大島、慰霊追悼の比較研究のための研修地であったハワイと、半年ずつ2年間続いた転住生活から戻り、いよいよ根を下ろして校務に精を出すつもりでいたし、大学外での地元とのつながりや生活環境なども、私の大切な部分となっていた。

結果として、家族を自宅に残し、単身上京することにした。実態は月に1、2度の帰宅にすぎなくとも、意識の面ではこちらが本拠であり、逆に東京へは長い出張の感覚だ。

東奔西想<1>キーワードは「職と住」

地域に軸足、往来の日々

共同通信配信(デーリー東北2014年1月24日)

体力的にも経済的にも余裕があると言えばウソになる。不器用な生き方と映るかもしれないが、自分では最善の選択だと思っている。行き来する中で、家族への思いとお世話になっている地元の方々への感謝の念が強まり、都会と地方の暮らしぶりの違いなどが際立って見えてくる。

近年では職場に縛られない自由な働き方をノマド(遊牧民)と言うそうので、私の職住分離のスタイルも見似ていなくもないが、地域に軸足を置き、足元にこだわる点で別物である。他方で、地域に常駐するレジデント型研究者というのも提唱されているが、拠点が二つとなった今、それも当てはまらない。先行するモデルがないかと考えると、意外にも身近にあった。住職として地元の寺院を守りながら宗教研究を続ける先輩たちの姿だ。

考えてみれば、この住職という存在は仏教の専門家であり在地の知識人でもあった。東日本大震災後、被災地で念じ祈りつつ、地域活動に取り組む仏教者、宗教者も多い。今年は「住・職」をキーワードに、地域と宗教と自分の研究を、往来の合間にじっくりと考える1年にしたい。(西村明 II 東大准教授)

種感動の拾った郷里 想西奔東

(信濃毎日新聞 2015年1月27日朝刊5面) 共同通信配信

子どものころ、寒い冬の朝に吐く白い息が物珍しく、登校時に息が切れるまで何度も吐いて遊んだ。世界は不思議なもの、未知のものに満ち満ちていた。大人になるにつれて徐々に物の道理に気づいてくると、世界の奥行きも消えていき、身近にあった感動がかえって遠のいていったようだ。

しかし、幼い日の落し物のように、ふと感動の種を拾うことがある。郷里の長崎県雲仙市での調査中、ホケマキ」という言葉に出合った。長寿者の葬儀では、しめやかさの中にもどこか祝祭的な雰囲気まじり、集落の加勢人たちにも遊び心が湧き起こるのだという。

それまで加勢などしたことない若手や転入者に対し、区長さん宅からホケマキを借りてくるよう」指令が出る。言われた方は大事な何かだろうと、慌てて使いに走る。区長宅に行くと、にやにやしながら「やられましたね」と、ネタばらしがあるといったオチだ。少し意地悪な人だと、それは前の区長のところだろう」と言い、使いの用を終わらせない。

東奔西想 郷里で拾った感動の種

共同通信配信(信濃毎日新聞 2015年1月27日朝刊5面)

調べてみると、これは隣県佐賀の各地に見られる「ホケマクイ」をアレンジしたものであるようだ。年末の餅つきの際に、子どもたちに近所の家からホケマクイを借りてくるよう使いにやり、結局どこにもなくて失意のうちに帰ってきたころには、餅つきの作業が終了しているという仕掛けだ。

好奇心旺盛な子どもたちが臼と杵や、蒸し器をのせたかまどに近づきけがをしないよう、遠回しの親心が生み出した暮らしのワザなのだろう。語義は諸説あるが、湯気を巻き取る道具というのが、もつともすんなりと合点がいく。

考えてみれば、郷里で生活したのは高校卒業までで、そこにある世界の奥深さに触れないまま、倍以上の時間を外の社会で過ごしてきた。

2014年の正月、この1年を職と住を考える年にしようと思った。その後、家族と相談して、鹿児島の本拠を長崎の郷里に移すことを決断した。しかし、仕事の拠点はそのまま。ホケマキを求めて訪ね歩くように、私の東奔西想の日々も続く。(東大准教授)

プロフィール

1973 長崎県雲仙市生まれ

→1991 雲仙普賢岳火砕流災害、高3の6月、夏休みの繰上げ、分散授業。

→2001 里帰り出産と博論の現地調査を兼ねて島原市に移住

→2003 九大学振研究員

→2004 鹿児島大

→2013 東大大

『東京大学宗教学年報』15, 1998年, 117頁

西村「書評 竹沢尚一郎『共生の技法－宗教・ボランティア・共同体』」

「「私たち」が実際に生きているなかで出会う困難に対して、議論のレベルから発せられる声は、私たちが生活している現場にまではなかなか届いてこない。そのことは、生きることと考えることのあいだにままたらぬ隔たりがあって、その隔たりをつなぐ道がいまだよく整備されていないことを物語っている。そこで、私たちは生活の場から議論の方へと自ら進んでいくことを余儀なくされるのであるが、ある者はその言葉自体が理解できずに引き返し、別の者は理解できても帰り道が分からなくなってしまう。」

『宗教研究』宗教研究 77(1), 2003年, 217頁

西村「書評 田中丸勝彦著『さまよえる英霊たち』」

「評者は本書から非常に多くのことを学ぶことができた。それと同時に、また多くの問いを宿題として著者から手渡されたような印象もある。その中には民間の学としての民俗学のあり方にこだわりつづけ、在野で研究を続けた著者の気概も含まれる。評者としては、この著者の姿勢を、大学再編の時代にあってどこに身を置き研究するのかといったレベルでのみで捉えるのではなく、研究をしていくとはそもそもどういう営為なのかといった根源的な問いとして捉えたい。」

柳川啓一「姉崎正治と柳田國男」

『祭と儀礼の宗教学』(筑摩書房、1986年)

「姉崎は「学校の学者」であり、宗教学は、幸いにして講座を置くことが認められて、学校に籍を置くことで学者となった」

「かりに、大学の、とくに国立大学教授の学問を「官」の科学、世間の学者の学問を、「野(や)」の科学とすれば、官の科学は、急速な成長を期待され、強制されて、その手段として欧米の科学の眼で、日本の現象もこう解釈されるべきであるとして来たのであった」

『鹿児島環境学III』, 2011年

冒頭対談「徳之島から日本を考える」西村明 & 小野寺浩

第三部 学問論・大学論

学問、大学のあり方とは

西村 さて、学問や大学のあり方について考えてみたいと思います。このことは、この鹿児島環境学の話が出たときから、もう一度考え直さないといけないと思っていました。今ここで鹿児島大学の教員をしていて、その中で自分が宗教学をやっていることの意味です。

そこに、震災・原発事故が来て、まさに問い返されたことは、いかにわれわれ研究者が日常に安住しているかということでした。大学の教員、あるいは研究者として発言を求められて、自分の存在を懸けた発言になっていないというのが一つある。学問、あるいは近代の科学というものが、何か確かなものをわれわれにもたらしてくれるという希望が一方ではずっと持たれてきました。そこには鉄腕アトムなどに象徴されるような未来を作っていくのが科学なんだというイメージがあった。しかし他方で、われわれの生きている「現場」、いろんなものを究極的に基礎づける生活世界というところから離れて、学問、知識を量産していった弊害としていろんなことが起こっている。大学で教える学問がわれわれの生活の全体とどうつながっているのかを、積極的に語ってきていないというのが現状だと思います。

『鹿児島環境学III』, 2011年

冒頭対談「徳之島から日本を考える」西村明 & 小野寺浩

では、私自身がそもそも何で学問を志したかということ、一番大きかったのは高校時代に雲仙普賢岳の噴火が地元であったことで、自分がどういう状況の中に置かれているのかを理解できれない。それを悶々と考える中で自分なりの問題解決をしたいと、学問の世界に入った。しかし実際は、研究室に安住する学問が主流で、なかなか生活の現場に戻ってこない。そこに対してすごく苛立ちというか、もやもや感がずっとつきまとうていました。非常に個人的な話ですが、私の父が板前で、その人生と息子の私がやっている学問とがどうつながっているのかということに対して、どこにも答えは用意されていない中で、宗教学や民俗学に共感をもってやってきました。その延長で鹿児島環境学に関わっているわけです。

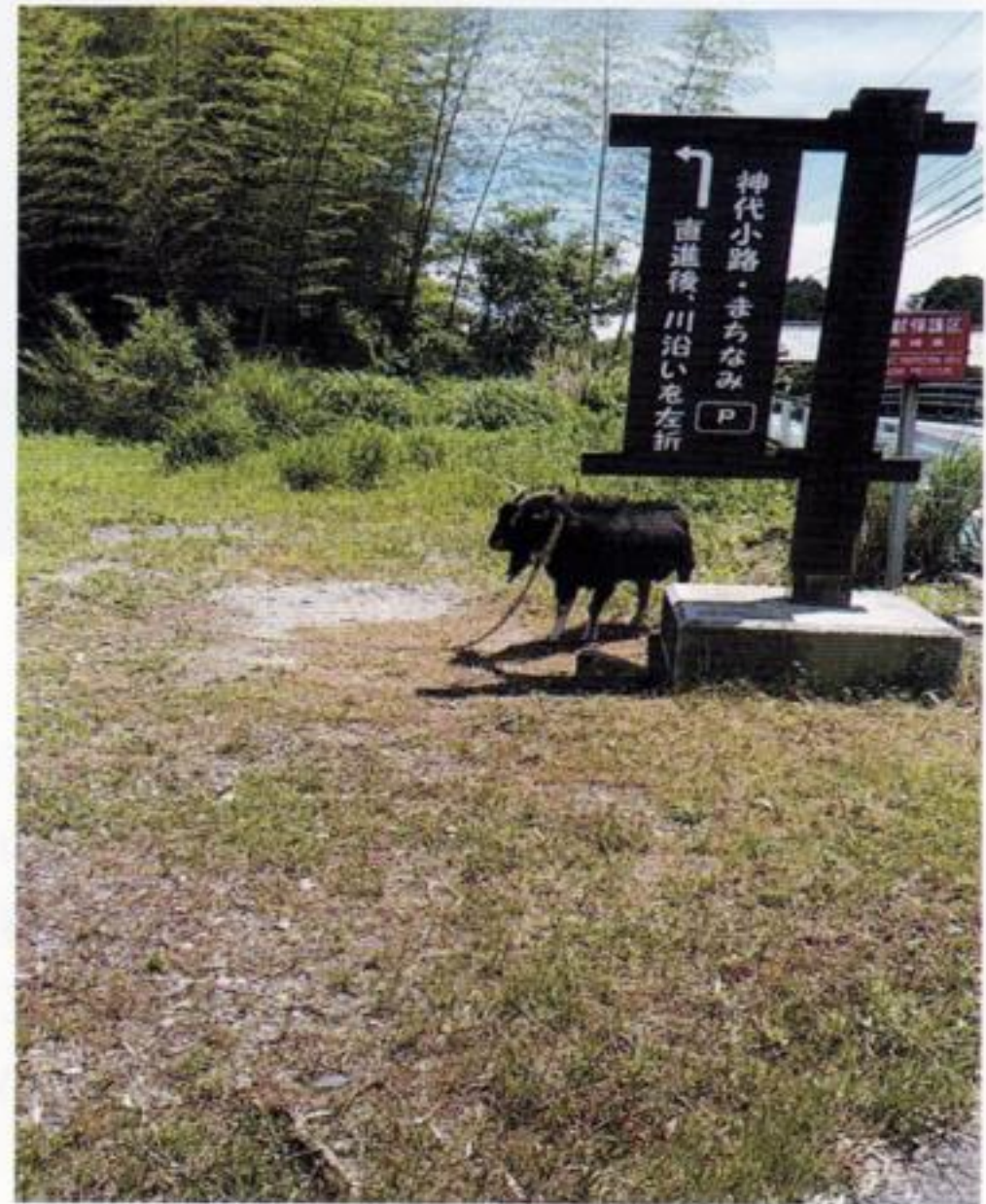
(略)

西村 そこは個々人の研究への構え方の問題が一つにある。学問というのが完全にピラミッド構造になっていて、その頂点を目指すという発想になると、地方大学での就職はスタート地点で、国際的な研究誌や、中央の大手出版社から本を出すなりして、中央を目指すという話になってしまう。今、地方にすることが強みとして思えなくなっている。地方にいて地方からしか見えない視点を積極的に発信していくことこそ必要なことなのに。旧帝大や、有名私大に学問の世界が一極集中していく状況があつて、地域の問題や個々人の抱えている問題の優先順位がますます弱くなる。要は、自分は何の権利があつて研究をしているのか、自分自身の存在も含めて問い返されてしかるべきだと思います。



Photo from Wikimedia commons

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A5%9E%E4%BB%A3%E5%B0%8F%E8%B7%AF#/media/File:Kojirokuji_Unzen_Nagasaki_pref.jpg CC-BY-SA3.0



《力才です。神代小路のまちなみガイドは任せてください》

編集後記

着工前



提供：雲仙市教育委員会生涯学習課

着工後



提供：雲仙市教育委員会生涯学習課



雲仙市—東京のOターン生活

神代小路まちなみ保存会(2003-)

伝統的建造物群保存地区(2005-)

「いまに生きる、いまに生かす歴史的空間における歴史実践 —「Oターン郷土誌家」を目指して」
菅・北條編『パブリック・ヒストリーの可能性』(勉誠出版、2019予定)



<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/news/news.php?id=WedJul191318012017>

科研費基盤(B)

「パブリック・ヒストリー構築のための 歴史実践
に関する基礎的研究」第4回研究会



グループワークテーマ

住むことと、仕事をする事（あるいは
学び研究すること）の関係はどうあるべ
きか（あるいは自分なら将来どうしたい
か）考えてみよう